報仇

金毘羅神霊記

二

へ13
3324
3

へ13
3524
巻 3

繪本金毘羅神霊記巻三目録

大正十八年九月
本大學出版部

二宮源八郎氏行の姓を嗣原故の作
二宮甲斐守氏行要人を答る図

其二

源八郎窮小家と辨ず作
二宮兄弟後事を議ず図
二宮源八郎瀕列小波ず図

源八郎逐中国女子九郎と戦ふ話

源八郎奇偶ある縁と結ぶ話

源八郎伊加間家を救褐の話

小若菊十郎継母と殺を図

源八郎功勲と弱を法

源八郎小若菊十郎を捕ふ図

民若源八郎妻女を娶ふ話

日図

繪本金毘羅神霊記巻之三

二宮源八郎民若の性と嗣原故の話

二宮甲斐守の小二男一女あり姉男二宮頼母と云

典膳小弥も未子を二宮源八郎と云て性質頼悟敏捷

才覚あるふうう父甲斐守愛長男頼母ふ新こう已ふ七八

案の須甲斐守自寫字債書を教授ふ一こう弟と云ふ

字式ふ一こう弟を教ふ亦十案ふ及で錯綜

師を撰で刀剣槍弓及弓馬の法を学ふ武藝ふ於ふ

天稟の才ありて自ら抜ふ半化技ふ及こう故ふ且文習練

して活殺会を為ふ其熟達の速なる年旬を以用ふ配

月を以案に寄べし幾案ふ及て頗ふ法門寄ふ勝れ一ふ

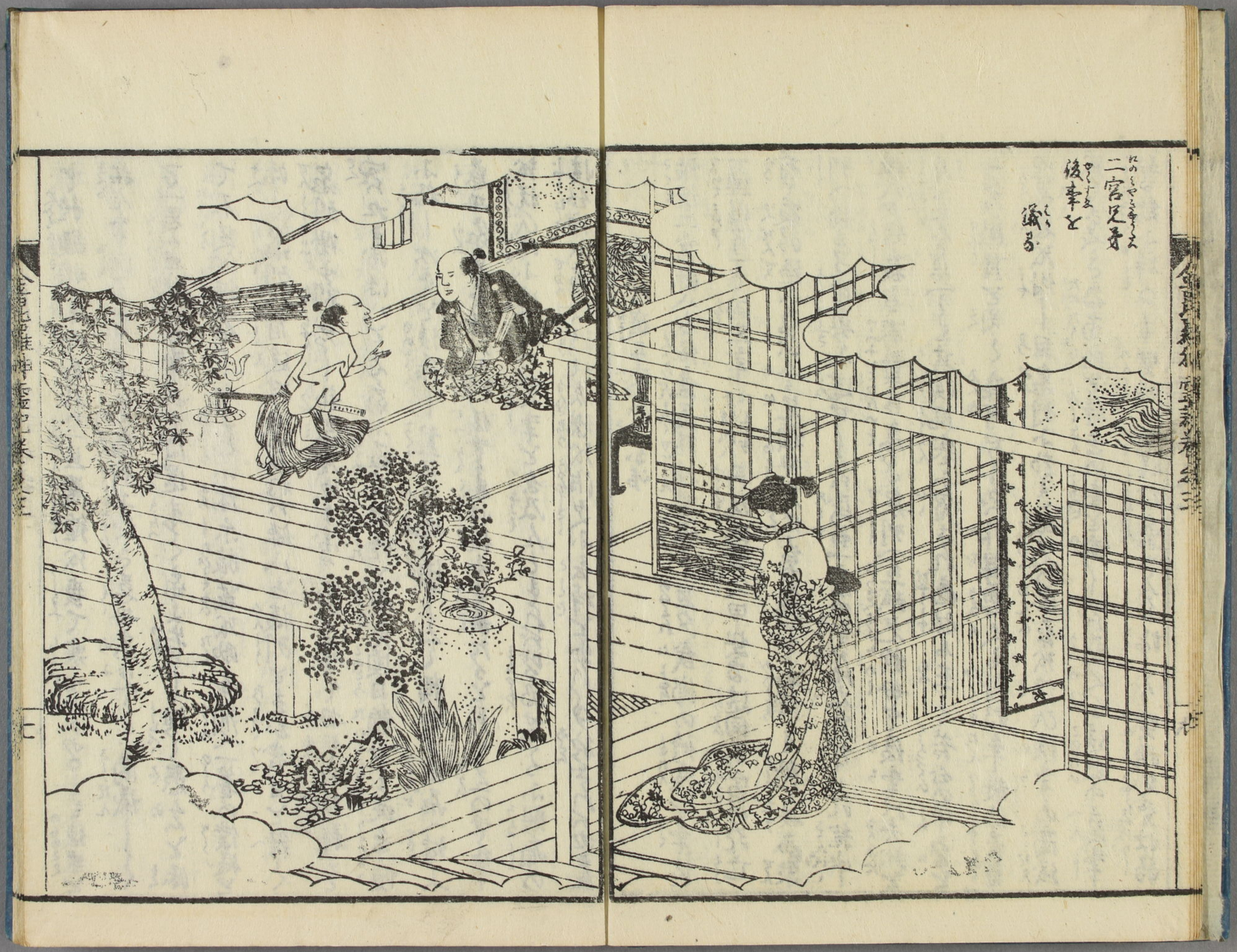
二宮甲斐守
民若要人形

人皆これを奇とせり[illegible]家小搦列赤松家代々士小民若要人也
[illegible]あり　二宮甲斐守の妻の兄なりて　幼稚より弓馬武藝を好み未壮時
類毋源八郎が外甥なり　父の許を請て諸国を巡り良師を需其門小住疾く洽く法流の
奥底を探り十有餘年を経て故郷小還り益研究して以て
法流を取舎し其最精密確乎中に就て着彼し自一流を真
立にこれ武民若流と称く竟小一家代師范たる成其流を多く奥
秘を傳授可を得る者亦おし　とせず赤松家の武名是小知られ後ひ
招ありて時民若を用の事あり　防列小列を帰路の次宮本武蔵
[illegible]小折しも甲斐守の車馬ふりふり民若を爰先招く代答意有て
後俄時紙袴ふり幸生を小和見ぎる代時を慰し式候夏の初先なれば
夕陽西小没く後座中の池畔小休棚を列し蓮子花濃艶なる小
臨む樹間の清風小対て再び妻紙用児女皆お小左く父母
の使令小応じ要人源八郎十時生年十八歳　殊て明敏氣分抜愛し二宮小
頭兼に楽し頻小源八郎対面あり　武藝を好よりを
称揚を要人同て源八郎を御と見もの紙を乞源八郎代を辞せ
器械を求んや休棚ふり立ち両釜の場撥翻て
迫く来るを民若声をかけ小源八郎を撃べ　て源八郎唯せ
対を繰く強力を抜ず見せ跳揚て左右を撃ば場場小
変じて偶小地上小投落ふり要人其勢捷紙源く補受し僕不
肖ありとも一流を真く後学を教道す水く系通紙伝九章紙
欲し今源八郎剰姚と云る小天鉄の妙を得く習練の為小変小
非ものの吾惜らく人方人学ぶ変の秘法華術あり　て正法紙

得ることもなし方今ようの系方ふ新く親しく孫廣弘加へるべ十
年弘起ぞして成功系ふ信一世を勧を達人ともるべ預を
救年れる来て託を乗べ空を全りれ二宮夫婦国ようふ人
変の僥倖ありと大ふ喜び拝く孫八が行装ふ懇へ民苦が出
本を拝ぎるれ日使く撫列ふ走しむ朝く孫八を外男要人ふ
慮従く沙路歳日を重ね民苦が伴ふ苦し辺ようの日を教場
ふ生教多の徒生ふ交ひて其流義を習孫氏元来好乃なるふ外
男民苦が誠実の教授を受く書史精通弘加へ老文叢を
弘も厳び和を貝ふ絶ぐ激励孫廣二十業に及ぶ比已ふその
奥義を伝へ伴可弘影るをいくども性自慢と世民一意研究の
功弘捷く積ようけふ

孫八郎竊母家弘去ふ話

俗説二宮孫八を倣意孟精神を凝し旦夕武術の修孫を率と
一連過ぎて西三年（子時孫八北三歳）再説孫八が父甲斐ぎる遠国不幸の死亡
有て家沙絶ふ及び全兄頼母戸沢苦厳つ和孫く母と技者泉
列へ移ぎる由奥ふ達せ一人民苦一泉の愛れ大方なる民苦孫中
孫八が懇哀を不贅言急ぎて泉列へ立越兄頼母を後事ぎ去ぎを
斗宣んと思へども其頃風寒ふ冒され病床ふ臥く若心の中ふ日を
かろう御月を望く癒可せ一人べ外男要人ふ対教年教海義育
の恩恵弘謝し旦泉列ふ勧さ母兄の安否弘湯ひ後事の商議
弘もぎべき為書置を拝去の志と奉一人べ云遠殺の愛事
繁る歎ふ祥ム一奥姪の懇情推察をるふ悟ようと奥姪兄弟壮弱


二宮兄弟
後幸を
願ふ

也軽顕階家命あれバ一旦萬鍾ハ喪て寒士也となるとも後栄を
招ん事近ふ有べし先泉列へ赴き慈母家兄とも商議しつく
万一愚意を決ざる事あらバ還来て家丈に告べし倶く愚意を添
て不足を補ひし也と窓越に孫に旅装ハ助事潤ハ一着の僕従を
添しく泉列へ首途せしめたれバ源八ハ擔列をさして数日を経て
泉列湯中到着し和泉屋九重湯が宅を尋て母兄の動静を
聞バ九重湯源八をむかへ家ニ留て旅情を慰先頃日頼母ハ主従あまた
ニ移し次男を後添し翌日自郷ニ遁して頼母が寓居へ伴ひ
慈母家兄ハ源八が別後世ハ悲壮健ニ生長たるを見て互の寿事
ハ悦び次ニ遠きの変事を云及んとも此バ皆ぬれせざるに其痛の
情ハ胸に遍くれて涙襟を治文に云辞を出れバ彼ぞれバ九重湯

側に在て母子兄弟の喜びを察し共に感慨に堪ハ立帰て頼母
源八ハ母の心を痛しめん事を恐て敢遠回の説話に及バ一連遍了
三五日盛時兄弟一家に聚て源八頼母に對て以て様に身と遠叙ぞ
地に来て長兄の意を聞て身上後来の事を識んかなら
先日和泉屋九重湯方に宿して粗動静を家兄に長兄青雲に
意あつく糾察に隠れて生涯を業とせんと也斗ぬる由宮に於る
ひや頼母善て家名宮に爾り賢兄更に稿れあるやし而源八
進退の小異ありて小父祖の志を継其業を墜ハ我くてハ孫に続る
を善とし家祖先君浮馬の若を汚ハ萬運の縁を絶く一族
の主也然るに幸唯其身の逸楽を思ひのみにあらハ子孫の後
業を計不朽の業を貽あるハ又子孫くるその不孝にして

失ひて自励精して其業を復し父祖の遺名を報ぜべし家名祇
園し郷里に隠れんを豈父祖の志を継と云べけんや且子い
父母の心を心とせんこそ必孝なれ吾父
は殺害の禍を蒙り家財を隠せし祇横死に遭ひ其悪家たる
を思ひ知り父の心を心とせば長兄一家の禍を上へ及ぼし威権を
当ふ志の人外にあるべし小弟熟思ふに同君に於くい義已に
絶えり能今後末再辟の時と雖ども位序伴禄扱ふ法てい十
分に一祇も得難かるべし況る禍ひ上に出く国政を執の務あるべ
き祇を長兄志祇変て他家れ養家に住身び家祇真し父祖の
祇を雪祇のうんこそ孫孝なれども熟思ふ思を加へ上べ也

奮発を新に祈して中られば頻母食を忘し保ゲ英気暁暗僕為
愛に思ふ去ぬ壮年にして世態祇終る事わく事理に於く
達せざる愛あり我祖芳寒溌ふ起く石雲家に妻娶てよう況
本身と忘れ君を先に国事と憂て家祇顧び忠直節義久
して益堅し祇業傳聞慶ふ世稜若の家に慶あって
留貴朝ざる小自知り接続く帝今に知れ元来君に忠祇を
心ゆして義を計んが為に妻娶のひ上あ祇家業一且家祇
憂ふ忠臣君に報ふれ志祇忘れば身を山野に終て家名を
郷里に埋こも家名を零し其業祇廃し云いつ能今後
小城に稼祇を導るこも居くるれ操に背び祖考の神霊家業
の系祇を快享給んや父の志に忠祇臣を宗こ孫に遠

二宮源八郎
濱州ゟ
渡る

紙の不孝一切れ不意に出て絶命を慮かりの葬式をなさるれば終身の
僕其の初の國に帰り来て孫止ざるもし以恨山那平生の志紙慶し一時
の機変に従て以く父の公を絶せしめ居るんやは
変に乗じて以て所をして浮くい偏ぐ〳〵笑弄係万く楽し僕と志を同し
山地に遁れ隔を慈母に奉て再降の招を待べし若終身まで農園
中あるとも不義にして笑孫を招れ面に比べい過に勝居しやと孫め
られば孫八再び紙面んとする所母を出く二人の孫編と御系屋返
に来て兄弟の志を聞て孫八がいよ〳〵勇士の身を立る操あつて強
元べきに有あるべし経頼母ゞ元忠居の義に会う枉べ元が元に従
居し世制せ〳〵べ孫八も慈母の恩に止ぐ〳〵強て仰き背まじ
中若一旦は兄の指揮に従よと経性質勇敢胴達られば父が最後

の弩撲を撫て涙〳〵して民間に朽果んを中遺憾思ひ稼くの人志を胸
に張て病も疲る中能ゞ忍奮然として思ひ乃ち父系生業武
と好て英説に橈の氣象我に傷辱あり〳〵隣丈屯しめ〳〵られ
ば徒に頑強の理に拘られ来中共に朽果んを父系紙屯しめる
要に有あるべ国父ゞ巡峯に云ゞ敷代忠顧の家と渡され悪家
る稽を張我恩統し為べ旧君に母慈あ〳〵べ家兄の志に
妙ゞ有れば孝〳〵べ勇たり〳〵も慈ゞ〳〵系八王襲ゞ操を出う孤子
晋ゞ志に徴ひ他に於く復家名を興屋し不得大ゞを相撲
紙類に今和家を出て孫と採し駒馬に鞍錦繡紙の附と為く
俳来く慈母家兄の指揮に背の罪と謝べ〳〵然れども何に
渡〳〵も親戚国交の接られば孤夫られば執贄の役宜雖べ

若何せんかと思慮ふかくしが爰に資財丸亀の善提所善願寺の密任和尚外戚医者要人宅旧識にして添八氏若に寓居時一面の交情なし事況遠念孝子なれば先彼寺へ到て便宜紙求く四国の産家に執贄数隙紙計るべしと忽ち一紙の書と送く其産家を密出但是を送こう却説頼母も新年こも却こて聖朝の名ふく起出後業に到ふ裏面一対の書あり悦こと披開に青雲の志願あるに開く作玉ふ去る此由添八ら遺書なり頼母喫一驚直に衆人を分て別くへ退尋紙知たと雖早其行清知れざきバあるべき拠なく唯花鉢中呆て後の便宜を後所已あり

添八郎　途中にて女子に逢と物語

匹夫志し紙奪ふ及べく奪ふべき志ふ非ざ斬こと二宮添八を他国に走て家紙與し父の犯紙雪んを慈母家兄の冠と用ひ窮ふ居捜を出遅ふ投西廷了排暁ふ兵庫津ふ到着し客店裏ふ入く酒飯紙喫し是より四国ふ渡んを店ふ二を叫く仮紙を要ふ幸換別金毘羅参詣の紙即今出帆さる由なれば急ぎ出発狼子を出銭賃と等還り客店裏を出渡に到ふ店ふ二添八が店裏紙桃子眼着送来こと紙色ふ在く萬福紙唱別きく店裏帰ふ頓て纜を解く後に紙爰し洋々たる海上ふ浮ふ時仲春天気明媚東風徐ふ吹く布帆ふ和し行遅ふ至る爰に茶海波静ふして白鷗洲渚戯き漁舟棹を指して来往く雲樹岸頭ふ紫く緑を重こ山上淡霞を帯て横蒼紙鈍江村煙を隔く連て所く光を開十分の好景眼前ふ満ち徒却是慈人の恵ふあるべき添八ら背の身上ふ行く

二宮
源八郎
と
詩ゞ

一城のまもる家ゝ生れ侍婦僕従ゝ若もなく汐
満もきらん流人と縁を結ぶ者ゝ府城五畿七道の人
とまで成果今日ゝ浦ゝ苔ゝ蓑ゝ接穂ゝ人ゝ吾身の
勢を思ゝ性附妻永の恵平家の一門生田の合戦ゝ
源ゝ北条も左ゝ右と挙られ迫ゝ建武の乱ゝ将軍西国
ようゝ上洛して同ゝ汀満の戦ゝ天下の剣の基礎定まる
の浮沈定光雖く吾もゝ時を待く花の後を翻ゝ再び海を渡
ゝ事よや慨然ゝて思ゝ傷しゝ伝を転意傳聞韓信ゝ楚の
為ゝ用られず漢ゝ仕く三軍ゝ帥ゝ吾是ゝ比ゝ屈辱ゝ
ども成功ゝ為ゝ頼ゝ通達せゝ一ゝ明ゝ遭ゝ家ゝ真人ゝ
雖ゝ自己を励ゝ且ゝ信の衆客を古今ゝ雖ゝ永路

の徒然ゝ慰ゝ若岸ゝ船を待ゝ兵庫ゝ雨林の絵乃国人ゝ
を見ゝ例ゝ思ゝ斯く程ゝ賛列九亀ゝ若せゝ一番ゝ
雖ゝ者家の賀を遂く者ゝ五人三人引ゝ知音の旅店ゝ入ゝ
源八ゝ初ゝ者ゝ受けゝ舟の中別く紀く浦ゝ両箇ゝ
浪華人ゝ打連く一ゝ園の客店裏ゝ入て歌ゝ已ゝ晴時ゝ
人ゝ世間ゝ宿ゝ明日金毘羅ゝ参詣ゝて源八ゝ今一夜森物
語ゝて連日の鶏屋ゝ徳ゝ合ゝ勧むゝ二宮ゝ湯遊の話
行ゝ移ゝ客舎の女使ゝ書願寺ゝ陪往及び行程ゝ
四ゝ庭里ゝ武十町許ゝ中ゝ船是浪華人ゝ再會ゝ期ゝ
別ゝ客舎ゝ出遅ゝ投路ゝ了十数町那衛上両班ゝ拉繋
枝葉ゝ斜ゝ狀ゝ遮ゝ茶路徐昏ゝ見ゆれば雖ゝ

折から側の松陰に跪踞たる女ありしが是も行路死の種なりなんと迄衰て倒れ居たり年齢廿許にして容貌卑からぬ女なるが死せるとも覚て其体動かず息も接されば源八大に驚き其死状を遍郷の者ともあれば此儘に捨置ならば里人の疑念を受ん幸ひの事早く立去らんと思ひ足を引返しが又思ひけるは他が体意ありて自害せしにもあらず面体又微の生気を帯る是正しく途中にて急病発し気を絶たる也し若後人絶て知るものなし此儘に捨置なば悪獣の餌となり真に他の性命を拾逸する事有べし俺是を知て救ざるは暴なり也復生還り女児の傍に寄て熟視まで一線の脈あ応ずるありて歯を切歯心下に動悸ありて果して揣るに遠路も先口を推開て一匙の霊丹を喞せ水を掬て口中に沃ぎ興解まへば女児頓て気息を接続金毘羅二宮を見るに大に驚る体なれば源八遥刻より其の揺揣に既に蘇活しけるに女児紅の臉中けるは妾は遠辺郷の者なるが平生積聚を患ひ今月幸勢ありて讃邑へ赴帰路遥里に至て那料痼疾発起都て東西弁ぜず幸に官人の救助に縁て性命を保ち給ふ御謝恩やかくしかも途中なれば没那道理官人の容貌を速勝に旅客と存ずれば蔑随魔に非べども萬望參我を弊宝に一宿してさせられて父に告て活命の為謝恩も申したく云ければ源八道人の難を見て患ざるは人情の常なり我適通りて救ひしのみ報情を受べき巳女児の禮謝を受るにおよばず且家路を急ぐも遠ければ汝もまた早く歸るべし女兒は早く復宅に帰られよと安穏に労りて辞し別れける

源八郎伊加間家に歓福の話

斯て源八を使行芙蓉寺に立て撥列民谷要人が一族
同苗源八客くれ後用あり〻く推参つるしを云へられ給持宝仕和
尚不審なげく院裏不信ど対面あるを相議の二宮源八を張く互ひ
寒盃を述足下二宮氏の二男あて方今民谷紙姓そし又何事ぞ
縁てら這里不幸れしそを尋ふ人ば源八新皇長列を退く奉和
泉列ふ轉後の次第と裏ふ後伝就く小人贄仕の云あつた能内親戚
の依べくなく外朋友の援ふ仕を故ふ幕く和書れ扶助を希ふ
旦ふ人青雲の時為る近源く疎紙捨し親戚係友ふを其居を知
れん事を欲せば有ふ浪風と恐れ給て民谷要也ヤセしう頼る
老師孤獨を哀憐ふ人尚風ふ足紙止むべき挙措を伝事ふ也捨
て頼しう和書も其志の切ある紙感ど足下母兄の命に背紙源を

捨れ事世態の理とりく云ば罷るし也ども紙ども云れ不父の高紙
徒んくあ有る足ば志れ気有て家を棄ふ吾仏門の奇ふ也さ云れ
慶ふう寄孤助ふ若紙数ふ国和通ふれもふしを焦急あるべ紙
即今日ふと民谷要也假ふ称へ院裏ふ義亟使宜紙求て贄仕の
志を遂べし也仲宗ふう是ふう民谷と不縁の者ふう也被家しく
院裏ふ及免亟れ足ば源八源く恩義を感し且夕和尚ふ事ふ
ふと父の如く左右して過ふ一月育修爰ふ九亀の家士ふ太屋国
紀とふる人ふう家禄七百石を紙し才文武と兼就中軍陣の法ふ
達せし紙以南村抜流の職を勤む南寺れ極家ふて後格家仕和
尚ふ対ふ交を親しく一日墓参の序方丈へ立寄使報列ふ
及び礼ば宰任好言ふう也源八と延過し遠濃泉列界浦ふ

金毘羅神霊記巻之三
十七

小若藤十郎
俄雨と
なれば

商家葉がつみて方今此名を民部源八中に弱冠より仕官の時既
あつく這般書面へ来り矢道所縁あるを仕官の吹挙既浪関て
止るを潔く院中に召寄るより足下好使宜あらば接引を待ひ
けるに土屋生源八が容貌起居なる商家のお年これ見へ
完英武の壮士は如くなれば公中怪しむ也とも子細をあらんを
強て問ふ家住小野山の商家士引小閑なるいかゝ即今僕が紹下
の歩卒一人を召るゝより新る旅役まて厳なくば今日五七事を
定るゝ中なる源八和尚の美貌を伺小人市井のお年唯
風刀以形よりの何過分れ仕を乞ひいんや歩卒ハりとより全む
乗ふて若うしゝ百姓下さ良也中なれを和尚も源八が云と
同く共小藤辞磐懇小軍指と待ひ〳〵土屋速小許諾〳〵

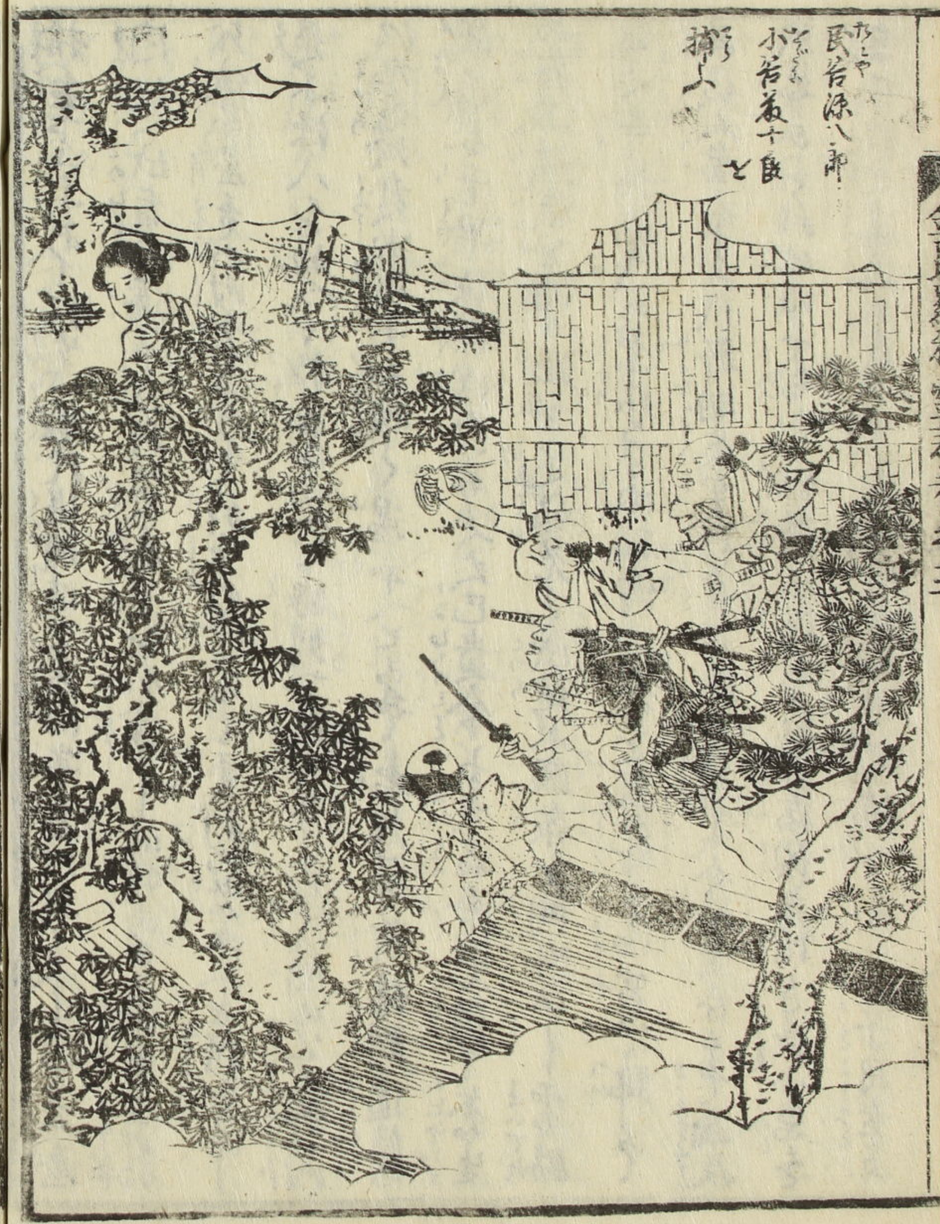
天晴の郎屬紙はうと也狸時小恢び拝く和尚小辞〳〵源八を
伴く郎小帰る即時小事公潤く郎下に加へ門会と与これ小経
〳〵見来獨身なれば万事に公と源寄小遇〳〵ひ是ば源八も甚之
に感〳〵暇日小入丈屋が郎小往奴僕の男とをて郎其家之紙
を附〳〵小入る

源八郎功勲を孔を活

粤に漢列九亀滅主伊加間遣酒頭政後君を漢列に於て十餘万石
は来地を領〳〵給ひ家制武道紙筆一也定られ〳〵重臣侍士也
〳〵及び歩卒に迄るまて武伎を励勉ざるいなく武徒に国に冠
ある支給仲国小就百里奚伍段小棄も大功と源の士細名小匿〳〵
さるが故へ新く民台源八を亡公が吹挙小国く商家の歩卒と云

職役と称し古代新条の法以伍中れたの労役を助ぶ事を始まり
職分不揃勿れ伍中親族やるく皆其為事を称し今の所是土
屋も弥其蠱使ること皆と楽し附をれく彼ゲ社を祭人と此金を民不其法
徳食産居の墓士小名義十良を敏法の教授せる者酒奥本京し絶田小潤献し
已が意本従さると時を絶田と教害し縁舎役逓逃れれく見分次身
抑虜ごと有足利家代歳令れると配分とのく各国へ達せ各張
之九竜ホも仏門の所家農民へ令役下して捜求らるる小城下の客
舎建居ホ寄官廳小出即今捜求の牌分小迫似ル族客頭目教
日逗留し五日以来湯治の先縁列へ卦とて疲足いこと小寄居々
汁強くい得た先衛屋中上作也作し久法国神流し編と採れの
已が行傷と人小若居れゆう船へ也縁列へ卦こと也国こい打

捨垂べこと小あるべ代先一緒代逗捕使を先向寄役探るべし也去屋
内記し氏有役通し久れべ去原是と仏学し此時去民若ゲ縁
役役小屋意の時意ゆ也役下の中ホも勇剛の若九人を探出し
是小源八を加へく教合十人と縁列へ疲向せし心十間の公人即時
江九竜役疲出逗小去殺く湯ホへとも疲意ゲる抑縁列逗後の
温泉を千早振神代のいあ人大巳貴命ホ意名命也後て養生
の為小湯療と治る法を定始先く氏地小温泉を開めひし霊験
いく幸物温泉の原始るる由相傳へ二神と探記く湯宮也雖々
其後人皇二十八代舒明天皇行幸はしく爾来今小至るまで痼疾
氏患ふ事氏地小多く霊湯小浴もるに疾病頓ホ除き長小患を
忘原於之遠近牛賤の手を浴湯の遊客輻輳牛幸于月益多


民谷源八郎
小谷義十良
と
捕人

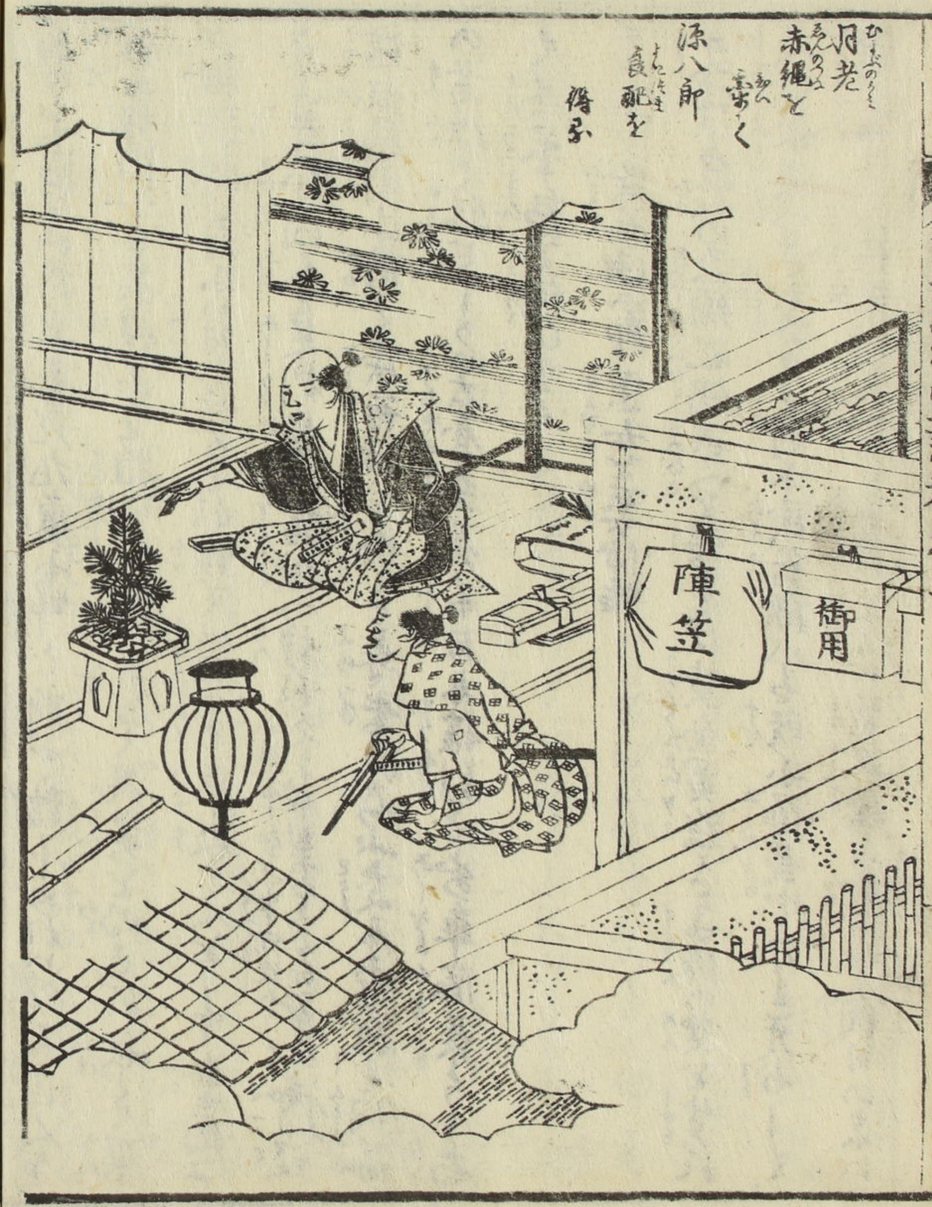
金時兄弟雅中語記巻之八

塩地の桑華迫岡に比敖るし、和泉郡十箇捕役八日あり、こ遣後
ふ見し、入湯の旅客しあり、客店裏に寓逆に湯に入る
旅客紙絹ひろふ小若が牌等に仰せられるりめ、也舟出遣あら
んや男に日捜索爰に捕役乃中亀阪林右馬つが宿し、客今に対て
小別室あり初ち人あり、も見へざりしが日と暮く熟視へ、ロ、ロ、
四に旅衣を、つ也見出だ亀坂に若なるんや公証ひ見ように風
邪の公地るつ也俗に引き亀て日を陸子れ岡に耳目紙後く絹人を
に一日婦女聊夫の如き者を誘て別室の掘燭に近寄毒の人を
う、客用あるく乃ち、ふやよ、てあるに是迄後ひとしく那
客此方へ座ひ、、也若に其付聊夫去見て作とひ、ぢ、べて
陸に紙筆さ拘系也一対の書状を待元休息して行べ、とて駕

障に紙筆に付亀坂に遣郎ら那客の体と熟視する不累し
牌等に対す分遠さ見ひ頭く教左せ、十箇の堂に通、民若深八
ら宿に集ると提搦ること計策紙筆後亀坂衆に対渠縦奴會ら
勇あること味方十人と以一人と投ん事何の方策にを及ふ、今
後不意に入く搦捕ひ、、也云られば民若頭紙掉頭に追捕の状を
和、、丸に所潜鶏嵐部猛と懸の乃理に入く楽死の物となるべ
の騒動やるるべ、果位中に入く来け役と執ひ系に紀れられ茅公姑
に方位を以一表取に入ひ、、也ひ、ば時其後に問、、熟に決八人の再
ら温泉、、うに付ひ、、体よりて、、亀坂ら客舎に飛て民若ら色
あ、ん付続て掩捕ひ、の備ら彰て民若深八ら聊夫の如に俗
壮丈一対の偽書紙拵乃亀坂が客舎に入て家々に大坂ら暴れるら

代家に逗留のつゝ客人ゝ家ゝ童子たゞしせいゝ綾舎の婦女なりて
其名称も回れされゝ小谷ゝ別室ゝ濃ひ色と通せゝうゝ小谷ゝ之一日ゝ
両度の死れゝ怪しゝうゝ漆ゝ孫ゝ代おゝ冥ゝ之出ゝうゝ民谷藤中ゝ
書状ゝ出ゝ委細ゝ書中ゝ非ゝ出れゝ小谷右のゝ手ゝ伸ゝ
見ゝ見ゝんゝ出ゝ取ゝ所ゝ民谷得ゝうゝ逃ゝ小谷ゝ取て掩
んゝ剛強ゝ小谷振回ゝ座ゝ出ゝ逃ゝ振向ゝ
ゝ見ゝ小谷抜ゝ見せれゝ漆ゝ孫ゝ家ゝ切付ゝ家ゝ
ゝ民谷ゝ付ゝ漆ゝ孫ゝ紙障破ゝ蒐出ゝ時民谷捷
身ゝ避鐵挺ゝ以ゝ小谷ゝ出ゝ新ゝ後ゝ
為ゝ眼瞬ゝ怯ゝ人ゝ漆ゝ右ゝ小谷ゝ見ゝ
縛ゝ小組ゝ其迯れ車ゝ囚電れゝ時逃坂ゝ始ゝ人ゝ者ゝ

竟ゝ小谷ゝ代捕ゝ多ゝ九亀ゝ帰ゝ新ゝ報ゝ
廳裏ゝ引ゝ其姓名ゝ推回ゝ小谷ゝ其実ゝ
ゝ相貌ゝ符ゝ合ゝ頓て徒士ゝ率数十人ゝ
ゝ免那囚人ゝ利家れ富嶽ゝ
這般謀ゝ放ゝ民谷漆ゝ孫ゝ働ゝ尋常れ
の者漆ゝ称せゝうゝ亡屋ゝ
も其筆勢ゝ何ゝ
民谷漆ゝ郎潔女ゝ
夫婦ゝ人ゝ大倫配偶ゝ人ゝ得ゝ黄金買雛ゝ漆ゝ孫ゝ
人世最性ゝ人ゝ漆ゝ民谷漆ゝ隊長ゝ
湾毛ゝ伍中ゝ應接ゝ


月老
赤縄を
繰く
源八郎
長脇を
得る
陣笠
御用

金毘羅神聖記卷之三
九三

此民谷が門舎に聚く困疾に一日に五人入来く毎のごく維活せしに
中にも年長の若源八に嫁娶に勤む源八養て家も其に娶たるもあり
祝ぎ婦道に成る若るべでは遠く捨ふしを召ひ撰ぶも其人を沒ぐる
成に婚娶の時に臨ざるふやあくんを伺ふまく云しに那老漢に
も兵を恵ぐ公酒ぐ婦道林に貴殿の事あり秘くゲ分ぎ秘
事を云ば生涯娶ぐ所べき婦ぐあるの事に林右衛門の例
ぐ否一緊にも云難し果ゲ初已場屋村の農家平左衛と云者の
女児去年月村の松原に行く乗病疲て路傍に行く氣絶せし平助
者族の士通あり世今絶せしに湖甦醒家に帰ぐ世其後那
女容貌好とぐく迎郷の豪農ぐ娶んぐ若数多あれど女を吏
の外す膚に人に見せざるのく先に乳絶の附縁の人に親しに今抱を

更醒膚に成も難し其人同生の恩もあれば吏として幸んを成人ぐ林
あかしに其時に林を立ぎ再び他人に嫁ぐに彼人の性
名行動ぐ成れば生涯寡婦に成く遂に寡婦ぐ
成ぐて後世に幸薄も其操に破ぐ世其ぐ行く家に
帰り見に成や婦道に得ぐ成ぐも云ぐ他ぐ
感ぐあ世ぐ然中源八に受あ年ぐ一面の家に移ぐ操とも
かく思に感服の情ぐ中時に思ひ出るに家東に年ぐ
誘ぐ成ぐ行ぐ移ぐ南ぐ他ぐ縁を結ぐ成ぐ娶ぐ
年に公ぐ世ぐ成ぐ世ぐ婦女農家に行ぐ世ぐ其操に林の
女も及ぐ後来青雲に志に天晴に士吏の婦ぐ成ぐ成
陣に楽ぐ膚に祝ぐ世ぐ人に国遍に挙ぐ寡ぐ遂ぐ妻ぐ成ぐ

愚人侮しり沒林右六を再び招き足下和水に入る塩屋村の牽宴
狀るうやゝ面右六婦ふあらぬやと善民若者を輩楽祇敷しふ即某
なるゝ方今其操祇聞て縫綿情小堪び足下不縁あらば家為小婚
嫁祇縁といひしらば右六且驚る且喜る家彼家を交情牽之べ的
小家に其女児の志祇嫌む足下已小如朝るらば是家形よるるう
媒妁を成く牽を側ふ屋しゝ即日塩屋村小往く云くれ由祇縁ば
平壽を祈ふ作あく遂小赤縄の縁を結び良辰を拝く婚儀をて
綱ひるる小及吏妻の恩愛偕老の契濃う辰年月祇送ふ此女ん
性壽元来分数ゆう後回とうく知ふべし

繪本金毘羅神靈記卷之三終